昭和31年11月18日
附録
編集兼発行人
平島敏治

社會主義協會の五周年を記念して

先頃、西ドイツとオストリーの社会民主党の首脳者が日本にきて鈴木社会党委員長との座談会の記事が、「朝日新聞」にのつていた私はヨーロツパの一流の社会民主党の首脳者の見識がこれかと思つてがつかりした。イギリス労働党のベヴアンの話の方がはるかに訓えるものをもつていた。先の二人には、ベヴアンのもつウイツトすら欠げていた。社会主義者のもつべき識見も、理論も、ファイトも感ぜられない。ドイツ社会民主党のもつた輝ける十九世紀の伝統はどこに消えたのであろうか。ヴイルヘルム・リープクネヒトは、アウグスト・ベーベルは、何処に行つたのであろうか。国際的社会主義運動をリードしたあの精力は、どこに亡び去つたのであろうか。マルクス・エンゲルスの科学的社会主義の栄光は、何時ドイツ社会民主党から失われたのであろうか

しかし、また私は考えた。西ドイツ社会民主党が六十万の党員をもち、オストリー社会民主党が七十万の党員をもつているということである。その党員の意識の高さがどのていどであるかは知らないかりに低くとも六十万乃至七十万の党員とはうらやましい限りである。

先年故稲村順三君が西ドイツに行つたときの話では、この六十万の党員のうち約八〇%は党費を完納しており、二〇%の未納者の多くは失業者その他類似の境遇にある者であるということである。

われわれの社会党は、登録党員三万五千。まことにあわれむべき状況にある、といわなければならない。一体これでいいのだろうか私は、日本社会党の最大の問題はこのことだと思う。経済五カ年計画をつくること、運動方針をつくること、平和と独立のために闘うこと、文化活動を大いに盛んにすること、そのどれ一つをとつても不用なものはない。そしてまたこれらの活動が、同時に党員の増加に寄与することも疑うことはできない。

しかし、逆に、経済五カ年計画と運動方針に実現性を与えるものは何か、党の強大な組織であるはずである。平和と独立の闘争、文化活動をやるにしても、この少ない党員とその動員力とでは大したことはできない。砂川の闘争には、社会党はよく動員し、よく闘つたしかし、このような形式の闘いはそろそろ限度にくる。次の段階の闘争は、全国的な規模で行われる条約改正の運動であろう。この運動を展開するには、三万五千の党員でどうなるであろうか。

問題は、しかし、ただ党員が増加するというだけにはない。保険の勧誘のように、すすめて、はいらせさえすればいいというわけにはいかない。社会主義政党が社会革命の主導力となるためには、党内に社会主義の理論で武装した誠実で敢然として闘う意識の高い党員が増大し、革命的党風をつくり上げなければならぬ。

そして、このように意識の高い党員が、額に汗して働く人々の中から出なければならない。そして彼等は、労働組合の中で、農民の間で、知識人の間で、その他働く一般市民の中で、最も忠実に、最も勇敢に活動する人間でなければならない。彼等は単に高い理論をもち、勇敢に闘うだけでなく、最も人間的な友情をもつて、働く人々と結びつくことのできる者でなければならない。

社会主義協会は、このような人々の成長に協力することを自分の使命として今から五年前に生れた言うまでもなく、協会自身なお微力で、日本における社会主義運動に極めて不十分にしか協力できない。協会のかかげた目標には、まだ大変遠い。しかし、その活動の成果は、少しづつ協会の発展となつて現われている。その支持者は社会党の中にも、労働組合、農民組合、その他一般に働く人々の中に、増大しつゝあり、協会の精神的な影響力の及ぶ距離はのびつつある。

社会主義協会はわずか五年前に東京にできたのであるが、その拠つて立つ精神は遠く日本の社会主義運動の創始時代にさかのぼることができる。

いまから六十年ほど前に日本に社会主義の運動がはじまつて間もなく、マルクシズムの理論を日本の歴史的条件の中に生かそうと努力したのは堺利彦（枯川）であつた。それは極めて困難な事業であつた。単に官憲の弾圧と闘うだけではなく、日本の歴史的土壌から繁茂しやすい、いろいろの雑草と競つて克たなければならなかつた

堺利彦は、その至難の仕事をやりつづけた。彼は昭和八年（一九三三年）東京自宅でその苦難の一生を終えた。社会主義協会は、この伝統を受けついでいる。堺利彦と共にこの事業の創始者であり、その総帥者でもある山川均は、なお、高齢にもかかわらず、われわれの陣営の先頭にあつて同等の裏えを見せていない。

いかなる国においても、労働者階級は必ず社会主義社会を実現するであろう。しかし、社会主義革命には一定不変の定式があるのではなく、その形態は、それぞれの国の歴史的、客観的条件によつて規定される。したがつて、各国の労働者階級は、各々ちがつた社会革命の道をもつだろう、というのは、マルクスの主張した所であるが、まさに、この言葉を真実に日本のものにしたのは、堺利彦と山川均であつた。

敗戦と共にはじまる日本社会の変化、民主々義的諸制度があつていどに定まり、これらの諸制度とその精神を備る最大最強の力としての労働者階級と農民階級の成長が、社会主義政党と労働組合、農民組合の運動強化の発展にあらわれたのを看取して、日本社会革命の道を闡明し、不動の態度でこの運動を衛り、指導をつづけてきたことを知らなかつたのも、山川均であつた。

大内兵衛もまた、主として学界にあつて、堺利彦にはじまる精神と伝統とを、そのがい御なる知識を駆使して、永年にわたつて生かしつづけてきた。社会主義協会はその精神の創始者として堺利彦をもち、山川均、大内兵衛という二人の先達を代表同人としていることを誇りとし光栄としている。

社会主義協会は、このような先達が、支配権力の弾圧といわれなき極左極右の批判の嵐の中につくり上げた精神と伝統とをもつて創立され、闘いの旗を高くかかげて進んできた。この精神と伝統とはさらに若い世代に受けつがれ、時代と共にその内容をゆたかにし、その装いを新にしながら、全人類に「新しい歴史」がはじまる日まで、働く人々の道をきよ火のようにてらしてやまないであろう。

いうまでもなく、われわれは社会主義協会の現状に満足しているものではない。われわれ自身の理論的訓練になんのうぬぼれももつていない。労働者階級運動の実践と結びつき、その中に生きて動かないマルクシズムの理論は、無意味であることを、理論的、抽象的にでなく、身をもつて具体的に、われわれは知つているであろうか日本における労働者、農民とその社会主義政党や組合運動の状態、これに対してもつわれわれの影響力の微弱さは、つねに、われわれを顧うつてやまない。協会員の増加、雑誌「社会主義」の発行部数も、停滞しがちである。雑誌の編集に改善の余地がないのではない協会の機構にも改善すべき多くの欠陥があらわれている。それをわれわれは、資金の不足にのみ帰すべきであろうか。

それにも拘らず、協会成立以来五年の月日は、無為にすごされたわけではなかつた。協会員も、雑誌の発行部数も、増大している。われわれの理論も社会主義運動と共に成長し、これに密着しつつある。殊に、社会主義協会を支持する若い世代がふえつつある。その人々の手で雑誌もわれわれの運動も新鮮さと活気と迫示しはじめている。雑誌「社会主義」が社会党と労働組合、農民組合の活動家の理論的拠り所になりつつある現状は、協会同人の何にもまして喜びとする所である。

六十年前に数人の人によつてはじめられた社会主義運動が、今日の大をなしている。たつた一人の堺利彦の頭に宿つた思想が、今日ゆるぎなき精神と伝統とを築き上げている。百年前にマルクス・エンゲルスという二人の天才によつて創始された世界観が、日本の現代に社会主義社会を実現しうる力となつて生動している。それは、戦争中のあの軍部ファッショの抑圧のもとにも生きつづけた。その力は、もはや、どんな誹謗、どんな暴力も抹殺することはできないこれは、いかなる支配権力も無視することのできない力に成長している。

正しい理論は必ず実現される。正しい運動は必ず克つ。歴史はそう教えている。

高橋先生に異議あり

三川　坂口次男

私は先日のみいけ附録の中近東問題に寄せられた先生の書かれたものを読んで機関紙の果す役割など考えながら意見を述べます。

総体的に読んで何かマスコミの二番せんじの感がしました。こんな談面だけの事なら、何も貴重な「みいけ」によらんでも、朝夕の商業新聞でいやと云う程見せられ読まされるからです。先ずおかしいと思うのはハンガリー、エジプトで起つた動乱を、各々の条件から無理に引離して混合してあること（少くとも文面では）特にハンガリーの場合、最初に誰が武力を行使したのか、それは旧軍人将校、憲兵、地主、少数の資本家等の反動分子が、中味の良い社会主義にしようとして要求した善良な民衆を利用して、人民の主権と権力を打倒し、再び地主と資本家を中心とする搾取社会に変えようとした事に対して、民衆を守るための闘い、社会主義を守る闘いである事を見逃してならないと思います。

反動分子を助けるために、アメリカ等からも一億ドルが渡されたりオーストリヤからは三十台の飛行機で反革命武装隊が送られていたりした事こそ目をむけねばならないと思います。勿論内部で人民に不満をあたえる様な政治のあやまりはあつたでしよう。あやまりを直すこと、あやまりにつけ込んで再び民衆を搾取して苦しめる権力が出来る事は違います。

これは明らかに革命と社会主義、人民の権力を守る闘いであると思います。曾つて中国が日本の侵略を受けた時あらゆる日本の侵略に反対する国々の援助を受けた事等思い起し、ハンガリーの現在の条件を理解出来ないでしようが、階級社会は根本的に支配と従属、社会主義の下では相互援助の協力関係が一貫するのは法則です。（国家間と云えども）

これに引換えてエジプトは明かに大国の小国に対する侵略であり独立を奪い取る反革命です。その底には経済的な利害と野心がむきだしており、歴史の車輪を人為的に逆転させようとする不正極まりない侵略以外何ものでもありません

なお後段になると暗にアメリカの傍観的な態度をさも戦争を欲しない平和愛好者の如くほめてあります（結果的には）なぜアメリカが手を出さないのか、先ず運河の問題で下手に手出しをするとパナマがあり、大統領の選挙があり（アメリカの民衆は平和を希う）中近東の石油を廻つて、イギリスと利害は一致しません。要するにアメリカ資本家の利益にならないから手を出さないだけであつて、決して平和を守るための本心ではなく自分がもうけるとなると、火をつけてでも飛込んでゆくのが彼等の止むを得ない姿ではないでしようか。勿論ソ連にもいろいろなあやまちもあると思います。アメリカもあやまりがあると思います。同じあやまりでも意識的に人民を搾取して少数の資本家を富ませるのと、そういう連中をなくして、沢山の労働者や農民が幸になる社会をつくることを目的にしたあやまちは区別されねばならないでしよう。強く感じた事は機関紙はマスコミに対抗する私達労働者の唯一の大きな手段であること、どんなに私達が正しく考え、見ようとしても流れてくるのはUPとタスばかり一方的な事しか教えず考えが毒されてゆく強いマスコミに対して、その偏見をなおし、頭にいろいろな事を批判して正しい事を発見する力を芽生えさせ発展させる任務を機関紙に求める時、ニュースを見ても、新聞を見ても機関紙を見ても同じだでは私達の進歩はあり得ないと思います。「ブル新聞の見ない角度から」を要望し、身の程を知らず高橋先生に意見しました。

【註】本稿は九州版「社会主義」前号を「みいけ附録」として組替印刷して三鉱労組組合員に流したものの中の高橋正雄氏の論説に対する反論である。

五周年記念講演会

社会主義協会九州支局

創立以来民族の独立と社会主義革命の推進の為に努力して来ました社会主義協会もここに五周年を迎えました、記念行事と致しまして左記の講演会を開催致しますので是非御参集下さる様お願い致します

日時　毎日午後六時より
場所　教育会館三階ホール（天神町電停）

十二月五日
社会主義とヒューマニズム　福岡大教授　大塚幸男
憲法改正論の問題点　九大　教授　青山道夫

六日
最近時の日本経済　九大　教授　高木暢哉
職場闘争の意義と実践　三鉱労組書記長　河野昌幸

七日
中ソの婦人の印象　徳永菁久子
マルクスを受け継いだ人々（解説）九大教授　島崎　譲
幻灯〈マルクスの生涯〉（解説）　向坂逸郎

〝個人的な惰性も集団の力は改革し得る〟

＝三池労組の生活革命運動＝

三池炭鉱労働組合では昨年の八月からヤマの封建的な旧習や給料のむだ使いなど、生活合理化のために主婦会と共同で生活革命審議会をつくり生活改善にあたつているこの運動を通じて三池労組では既に多くの改革を成し遂げて来た。正月の門松、回礼、贈答の廃止をはじめとする一連の虚礼廃止は全国に誇り得る因習の打破であり、地域分会を通じて行われる諸行事や申し合せは、逐次不健全な慣習を追放しつゝ健全な生活環境を生んでいる。しかもこの運動は昨年だけでも社宅から地域へ、さらには全市的拡がりへ展開された事例も少くないように個人的な惰性を集団の力で改革し得ることを立証している。

本年もまた第五期の生活革命審議会が開催され、第四期までの実績のうえにたつてさらに次の目標である問題を提起し、社宅の隅々までいまその討議が進められている。

主な実践項目を紹介すると

一、正月料理を簡素化する、このため社宅を中心に正月料理の講習会を開く。

一、回礼をやめるかわりに分会毎に集団拝礼式をやる。

一、給料は一日寝せて使う今月からは一度家まで持つて帰る習慣をつけたい。そして一日寝せて買物なり借金払いをするこのため次の如き印刷物をつくり各戸に配布貼布する。

「地域分会の申し合せによりこんど新聞、牛乳代、その他カケ金の集金は、十六日以降にお願いします」

一、家族会議の開催

一家の主な計画は主人だけでなく主婦やものゝわかる子供も知つておく必要がある。共済会、金融などの利用や保証人には家族皆んなと相談する。

生活の生計に当つても子供を含め皆んなで考える。

人々の手で雑誌もわれわれの運動も新鮮さと活気と迫示しはじめている。雑誌「社会主義」が社会党と労働組合、農民組合の活動家の理論的拠り所になりつつある現状は、協会同人の何にもまして喜びとする所である。

六十年前に数人の人によつてはじめられた社会主義運動が、今日の大をなしている。たつた一人の堺利彦の頭に宿つた思想が、今日ゆるぎなき精神と伝統とを築き上げている。百年前にマルクス・エンゲルスという二人の天才によつて創始された世界観が、日本の現代に社会主義社会を実現しうる力となつて生動している。それは、戦争中のあの軍部ファッショの抑圧のもとにも生きつづけた。その力は、もはや、どんな誹謗、どんな暴力も抹殺することはできないこれは、いかなる支配権力も無視することのできない力に成長している。

正しい理論は必ず実現される。正しい運動は必ず克つ。歴史はそう教えている。

道標

来日されたエチオピア皇帝が、金ピカの六頭馬車でいたるまでその枠を拡げ衣料、餅の一個カンパ運動をおこしているが本年も実施する。以上が実施項目の主なものであるが、三池労組ではますますこの運動を強化して単に生活環境の整備や無駄排除のみでなく民主的社会秩序を確立する基礎にしなければならないと語つている。

明るい我が家は家族会議から……をスローガンとする。

一、年末扶け合い運動への協力

昨年から組織外の貧困者はいうにおよばず組織内の長期病欠者等の組合費免除者にいたるまで

皇居を訪問する写真がのつていた何十年ぶりかに、埃をはらつてもらだされた馬車だという。その写真はどこか「ハダカの王様」という話を思いださせるものがあつた世界一、軽く、美くしい衣裳を織らせて、着ているつもりの王様が実はハダカであつた。王様が誇らしげにふんぞりかえればかえるほど、それをみている人々は笑つた知らぬは王様だけであつた、という話である。

三千年の伝統をもつ皇帝と、二千六百年？の伝統をほこる天皇が会見される図には、どこかにオカシさがただよつている。王様の行動には、こんにちではつねに、いくばくかの喜劇じみたオカシさがとゞまるものらしい。

◇

喜劇にさらに箔をつけようという話がある。日本のつき合いも世界的になつてきたから、儀仗兵を復活させようという話が、この前の閣議ででている。いよいよ道化芝居に念がはいつてくる。着飾つた兵隊と鉄砲で顔をそえようというのである。しかし、笑つてばかりはすましていられない。この高価な、コケおどしの、子供じみた玩具代を支払わされるのは、われわれ国民なのだからである。こういうことで世界並であることを驕わなくても、世界並にしてもらいたいものは山積ある。いまの日本は、どうも歴史に逆行するような点ばかり真似たがつているようだ馬鹿もやすみやすみにしてもらいたい。